

桜蔭俳話会 十二月句会 (第三四一回)
平成二十七年十二月二十日 (日)

十二月八日G.パンてふ日常着 才美

鑑賞:鬼畜米英の敵性語が敗戦を機に well
come English に転じた、日本人の変わり身
の速さへの痛烈な風刺。「G.パンの日常着」
が効いている。

雪女郎着たくはないか江戸小紋 明美

鑑賞:安物の着物を着ている雪女郎に対す
る問い掛けが、(高価な)江戸小紋の着物を着
てみないかとは。雪女郎もさぞや出鼻を挫
かれたことであろう。「江戸小紋」が効いて
いる。

病む人へ冬青空をとつておく 才美

鑑賞:空は何処にいても万人が目にし、直ち
にその様子を知り得るもの。その空を病人
のために取り分けておきたいという作者。
「とつておく」が新鮮である。

揚げたてが走つて来るよ牡蠣フライ 朋子

鑑賞:文語的表現では、「揚げたての牡蠣フ
ライ持つ子の走り来る」となるうが掲句の
口語的表現には敵わない。躍動感あふれた
句になっている。

断捨離の言葉に揺るる年の果 弘子

添削:断捨離の呪文の一つ年の果 評
者には主婦への呪文に聞こえる。

小春日の占ひコーナー客一人 明美

鑑賞:小春日に誘われてふと占ひコーナを
覗いてみたら客が一人いたという。それだ

けのこと。作者は初めから占ひなんて信じ
ていない。小春日の斡旋が軽妙である。

奈良筆の雪の音して万葉歌 才美

添削:細筆の雪の音して万葉歌 奈良
と万葉ではつき過ぎ。

寒禽やあけぼの杉の雨晴れて 朋子

鑑賞:「あけぼの」は夜明けの「曙」。あけ
ぼの杉の雨が晴れる、という言い方は佳い。
しかしながら「て」止めは不安定なので避
けたい。

添削:寒禽やあけぼの杉の雨晴るる

水仙やちりちりと鳴る空の紺 朋子

鑑賞:冬青空の冷涼な様子を「ちりちりと鳴
る」と形容したのは上手い。しかしながら、
空が「鳴る」とまで言う少し行き過ぎか。
代わりに全部擬態語で押す方法もある。「ち
り」は偶然にも英語の "chilly"に通じる。

添削:水仙やちりちりと空の紺

黄落の並木ぞ見ごろ昨夜の風 弘子

添削:黄落の並木の見ごろ昨夜の風 強
意の「ぞ」は掲句では重くなる。

そばだてて霜夜の耳となりし猫 才美

添削:そばだてて霜夜の耳となりにけり
まず最初に作者。それから、周辺の小動物
を当てはめる。掲句では作者自身。

晦日蕎麦細く長くの願込め 眞壽

添削:新幹線北海道へ晦日蕎麦 原
句では季語の説明になっている。細く長い
ものを想像する。

お散歩の保母うしろ向き冬うらら 弘子
添削：散歩する保母うしろ向き冬うらら
俳句では、極力「お」は避ける。

枯菊のかそけし音も刈りにけり 弘子
添削：枯菊のかそけし音を掴みけり 莉
るの前の動作にして「も」を消した。

鬼柚子や朝日がいっぱい丘の家 ヤエ子
添削：朝の日を浴びし鬼柚子丘の家
家が丘の上になれば朝日はいっぱい降り注
ぐであろうから。

里便り白菜包む新聞紙 かおる
添削：白菜を包む新聞里便り

柚子浮かぶ湯煙り薫る露天風呂 眞壽
添削：柚子風呂や湯気に隠れし膝小僧

冬空やゲツテルフォンケン歌いおさめ かおる

添削：冬空へゲツテルフォンケン歌ひ締め
出来るだけ十七音の定型は守る。

小春日や車椅子の子の管つけし ヤエ子
鑑賞：車椅子を利用出来るようになって、
点滴治療は続く。その子の保護者の心配の
種は尽きない。管はチューブであり、「くだ」
と読むのであろうか。

添削：管つけし子の車椅子小六月 着目
点の「管」を先頭に。

只一つ積れる雪に熟し柿 眞壽
添削：実の残る柿の白雪の降る頃か
異なる二つの季を一句にまとめるのは矢張
り難しい。

水温の冷たさを浴ぶ泥野菜 明美
添削：泥野菜冷たき水をくぐりけり
大方の農家では今、自動洗浄機。

風に乗り木の葉踊るや夜半の月 邦子
添削：風に乗る枯葉のダンス夜半の月

杣道に廃家の多し柿たわわ 幸
添削：柿の木の枯し廃屋杣の道 冬の句
にした。

ボートみな船底見せし冬の潮 幸
添削：貸ボートみな裏返し冬の潮 ボー
ト自体は夏の季語であるが。

氷の眼の帝のありて兵馬備 幸
添削：留保：氷の眼の表現は巧みであるが、形
容として用法であり、「氷」の季語性には問
題がある。

魚目覚む水族館の冬花火 明美
添削：眠りなき水族館の冬花火
水族館の主役は魚類。

悔ゆることのみ多くして年暮るる 邦子
添削：悔ゆることばかりなりけり年暮るる
しかしながら、年の暮に感慨に耽るのは普
通のこと。

凍雲や土鍋に睨む鯛のかほ 朋子
添削：隙間風土鍋に鯛の目玉かな
「かほ」では散漫。焦点をもっと絞る。室
内の季語の方が良い。

軒下に新芽のありしシクラメン かおる

添削：軒下の鉢に新芽やシクラメン
ただし、季語としてシクラメンは春。

絶叫は花やしきより冬うらら
朋子
添削：冬麗かの絶叫は花やしき

天地を入れ替えてみる。

来る年の愉しき願ひ日記買ふ
邦子

添削：愉しきを書き込むための日記買ふ

来年の出来事を書き込むために日記帳を買
う。
朝日出て枯枝赤く染めあげぬ
ヤエ子

添削：枯枝を赤く染めたる朝日かな
ヤエ子

冬帽子大いちょうみあげ初句会
かおる

添削：初めての句会の席や冬帽子

願はくば都会の汚れ雪よ消せ
眞壽

添削：雪よ降れ街の汚れの消ゆるまで

立話し色とりどりの毛糸帽
邦子

添削：毛糸帽額集めて立ち話

室咲きの花買ひ足して人と逢ふ
朋子

添削：ポインセチア買ひ足し人と逢ふ

花を特定してみる。

冬滝は僅かに水が流れ落ち
眞壽

添削：一筋の水の光や冬の瀧

やはり、季語の説明はしないこと。

叱られて言ひ訳長き寒暮かな
明美

添削：延々と続く言ひ訳寒暮かな
「叱

られて」と「言ひ訳」のどちらかにする。

片隅の片付かぬ物冬座敷
弘子

添削：片付かぬままの山積み冬座敷

車窓から凜とした富士冬深し
邦子

添削：車窓より富士の凜々冬深し

俳句は韻文(リズム)。

枯土手や密やかに咲くピンクの花
ヤエ子

添削：枯れ残るコスモスの土手駆け上る

俳句を作りにくくする気候変動。

冬の朝陽の匂ひの机カバー
かおる

添削：冬の朝机カバーの陽の匂ひ

児を乗せて自転車疾走霜の朝
ヤエ子

添削：子を乗せし自転車疾し霜の花

保育園へ急ぐのは朝。

晩秋や書棚の史書に眼をこらす
幸

添削：初冬や史書の書棚に目をこらす

目的の史書を中心に置く。

短日や喪中の葉書二枚あり
幸

添削：短日の喪中の葉書手に二枚

(不在投句 古野明美)

(文責 代表 増田 守)

「事務局からお知らせ」

○一月の食事会と句会

(食事会) 一月二十四日(日) 正午から二
俣川駅ライフ四階の「仕立屋」で。正午少

し前にお出で下さい。

(句会) 食事会終了後、一時から、五階の
旭区民文化センター・サンハートで行いま

す。

○通信句会投句

締切り・二月十日。一月中に投句用葉書を送ります。

○三月句会

三月二十七日(日)、午後一時から、旭区民文化センター・サンハートで行います。